東日本大震災―消防現場の方々から学んだこの10年―

常葉大学社会環境学部、大学院環境防災研究科教授　重　川　希志依

1　はじめに

平成23年３月11日午後２時46分、東日本大震災と呼ばれる被害を引き起こした東北地方太平洋沖地震が発生した。三陸沖を震源域とし、破壊された断層は長さ400km、幅200kmの広範囲にわたり、地震の規模を表すマグニチュードは9.0と、世界史上４位の極めて規模の大きな地震であった。あの時テレビで報道され続けていた、津波が襲来し人々の暮らしのすべてを奪い去っていく映像に、私たちはみな発すべき言葉もなく、ただただ茫然とテレビの画面を見続けるしかなかったことが昨日のように思い出される。

地震発生から４日目の３月15日、筆者はネットワークおぢや（※注１）のメンバーとして、被災地の自治体支援、特に被災自治体にとって膨大な業務が発生する罹災証明書発行と建物被害認定調査の支援を目的に岩手県から宮城県までの沿岸部を回った。市役所の庁舎や学校、病院など災害対策の拠点となる建物がことごとく破壊され、救助活動にあたる消防や自衛隊職員を除けば人の姿はほとんどなかった。数日前まで、確実にここで暮らしを営んでいた方たちは一体どこへ行ってしまったんだろう？どこでどうやって命をつないでいらっしゃるんだろう？この問いに対する答えを探すために、この10年間にわたり被災地の多くの方々を訪ね、直接お話を伺ってきた。防災を研究対象とする私たちも、調査研究を目的に被災地を訪ね、被災者の方たちにお話を伺うことはとてもできずにいたが、１年が経過したころから少しずつ、調査の準備をしながら被災地でお話を伺うことができるようになってきた。本稿では、10年間の調査研究活動の中から、消防現場の方たちの奮闘から学んだ三つのテーマについて紹介させていただく。一つ目は本来業務として東日本大震災とかかわった緊急消防援助隊、二つ目は職業を持ちつつ地域のために日々尽力されている消防団、三つめは地域コミュニティの中でボランタリーに活動する婦人防火クラブ員から教わった話である。

2　緊急消防援助隊活動

東日本大震災では、地震発生当日から消防、警察、自衛隊などによる極めて迅速かつ組織的な応援活動が展開された。津波により激甚な被害を被った地域は南北約500kmにも及び、被災地の道路上には膨大な量の瓦礫が散乱していた。被災地救援のためには、まず被災地までの道路確保がなにより重要であるが、この度の大震災では、極めて早期の段階で道路啓開活動が進められている。この活動は、国土交通省東北地方整備局を中

心に取り組まれたもので、「くしの歯作戦」と呼ばれている。まずはじめに、被災地を南北に縦貫する東北自動車道と国道４号線のルートを確保し、その後、沿岸被災地と東西に結ぶ道路を次々と啓開していったもので、震災の翌日には既に岩手県釜石や大船渡までのルートが確保されていた。この活動を支えたのは、全国の国土交通省職員が総力を上げて取り組んだこと、また、日頃からネットワークを有する多数の工事関係者の昼夜を問わぬ作業があった。この素早い道路啓開活動があったからこそ、津波被災地での人命救助や行方不明者の捜索活動を行うことが可能となった。

写真１　出動途上の緊急消防援助隊（平成23年３月15日）

写真２　道路啓開作業中の工事車両（平成23年３月15日、釜石市）

東日本大震災においては、岩手県、宮城県、福島県をのぞく全国44都道府県から緊急消防援助隊が派遣されたが、この派遣は平成15年の制度創設以来初めての消防庁長官による出動指示を受けたものであった。緊急消防援助隊は３月11日から、その活動を終了した６月６日までの88日間に28,620人を被災地支援に派遣しており、延べ派遣人員は104,093人に達している。緊急消防援助隊の基本計画では、全国を６ブロックに区分して近隣都道府県を中心に順次出動範囲を拡大する計画となっていたが、東日本大震災では発災直後から全ブロックの緊急消防援助隊に出動指示が発せられるなど、当初計画にない派遣となった。また派遣先は、主として津波被害をうけた東北沿岸部の被災地であったが、巨大災害であったために被災地の状況がわからず、また、情報が少ない中で広範囲に広がる被災地に全国から派遣されるため、隊の編成、派遣先の決定、転戦、想定した活動内容と実際の活動の違い、警察・自衛隊との連携体制の問題、交代など、多くの課題に直面した。さらに、東京電力福島第一原子力発電所の事故が加わり、放射能のリスクに対する対応など、きわめて難しい判断が迫られた。

筆者らは、派遣された緊急消防援助隊の活動を、緊急消防援助隊本部内における活動、

指揮支援隊および都道府県隊の活動、緊急消防援助隊活動全般の３つに区分して、震災から一年が経過した時期に活動に参加した全国の消防機関を訪ね、詳細なヒアリング調査を実施させていただいた[1)]。その中で極めて印象深かったのは、緊急消防援助隊活動のロジスティックスに関わる問題であった。以下に、後方支援隊として参加した隊員の発言の一部を紹介させていただく。

（後方支援隊として参加した隊員の発話より）

①最初の任務は撤収活動

私は今回の災害で、後方支援隊として２回活動をいたしました。本来であれば救助活動に専念したいというところなんですけれども、タイミングと、局の中でのバランスで後方支援としてやらさせていただきました。３月19日の朝７時ごろ、警防部長から、県隊の第３次派遣の撤収がかかるから、撤収要員で隊員を連れて行ってこいということで、当直が明けて労務負担がかなり隊員にもあったんですけれども、今後の経験になるので現場を見てこいと言われました。６名でトラック２台で宮城野の消防署まで向かいました。朝10時に出まして、その日の夜の８時ぐらいに宮城県仙台市宮城野に着きました。第３次派遣は撤収の準備で、資機材がいろんなところに広がっていて、大型テントが３つぐらいあったり、その中に資機材や食料があったりと、それを全部撤収して、次の朝にはトンボ帰りで局に帰ってこいという指令でした。

本当は活動したいという思いもあったんですけど、この状況を見て後方支援に徹しなきゃという思いが再認識できたというか、活動してもらった隊員とこれから活動する隊員と、そういう人がノーストレスで活動できるような後方支援が必要と感じました。

②拠点となった福島県消防学校での活動

福島県の消防学校に全国の救急隊と後方支援隊を集めてそこを拠点として、東京電力福島第１原発の20km～30km圏内の方の搬送に備え、救急隊が何十隊も待機していた状態だったんです。われわれ県隊として情報収集するに当たって、機動支援車が欲しいという依頼があって、３月28日の夜７時ぐらいに私と隊員１名、合計２名でその支援車で、今度は福島の消防学校に向かいました。全国隊員合わせて、200人から300人ぐらいはいたんです。

私どもの県の本部が１つの倉庫を借りていて、倉庫の中を見たとき、ものが乱雑に積まれていたり、隊長間のミーティングをやる場だったんですけがとてもミーティングをやるようなところじゃない。それを見て、とりあえずここを整理しようと話し合

い、いろんなものを整理して机も丸の字型に並べてちゃんと話し合える場所をつくりました。自分たちの行った役割は、環境の整備と、食事の関係の収集と在庫の調査と、その辺をやらさせていただきました。

朝は６時に起床し、まずお湯を沸かして食事の準備を整える。救急隊が車両の整備とか資機材の確認をしている間に、住まいの空間の整理です。掃除もした。昼間は県の消防学校の中を回って、どんなものがあるのか、隊員に情報提供できるように、材料を探していました。また、昼飯、夜飯って来ますので、お湯の手配、在庫の確認、本部との連絡とか、そういう時間割りで活動していました。

食事に関しては、アルファ米とカップラーメンが主でしたね。朝アルファ米にお湯を入れて、昼飯用でリュックに入れて、昼間食べるころには、凍ったような状態でそれを食べて活動するので。それならば、チョコレートとかそういうものも多く今後は持たせてもいいのかなと思いました。実際、福島の消防学校の事務所の中では、カップラーメンとアルファ米プラスお菓子、これを常にだれでもとれる状態に置いておきました。福島の消防学校には全国から緊急消防援助隊が何百人と集まっているんですけども、集まっている救急隊の割には事案も少ない。１日きょうも待機か、あーあという声も聞こえ、モチベーションの維持が大変でした。１日のプランを組み立てたり、後方支援としてどんどんアドバイスして、モチベーションを低下させないことも重要かなと、今回の活動で感じました。

写真３　関西地域からの派遣部隊に関する調査の様子（平成24年３月）

写真４　被災地内の調整本部に関する調査の様子（平成24年３月）

③重要だった食事やトイレ等の環境

食事については、１次派遣隊はアルファ米だけで、あとは個人が署の自分の机の中にストックしていたカロリーメートのようなものを食べていました。それでも食事の

時間というのは楽しいもので、電気ポットがありましたので、温かいお湯を入れられたので、まだ食事はよかった。

ほかの緊急消防援助隊を受け入れてくれないかという打診が来ましたけれども、緊急消防援助隊は野営地はあっても、トイレをどうにもできないということで、なかなか指定できなかったんです。結局、宮古市には、秋田県隊１編成隊しか来なかったですが、トイレの関係で指定できなかったというようなことを覚えています。

自分も隊員もストレスがたまるのはトイレだと思うんです。食料だとか、テントだとか燃料だとか、支援隊にはあるんですけれども、トイレのキャパ的なものは考えていなかったのは事実です。長期化になれば、それを持って帰ったりしなければいけませんし、一番率直に感じています。

自家発電が使えるところは、電気ポットぐらいはありましたけど、水道もとまっておりましたので、２日目あたりからトイレの大のほうが流れなくなって、入ると山盛りになっているんで逆向きでやった。非常に衛生面は、不衛生でしたね。それも３日目ぐらいには、解消されました。

後方支援のやり方は各都市ばらばらです。調理器具もあらかじめ持ってきてチャーハンをつくっているところもありました。大きなところだと材料も確保するのが難しいので、アルファ米とか続いてしまうんですけれども、ちっちゃな本部でも何人か単位で来ているところは、それなりのものが用意できるので、調理しているという状況でしたね。

風呂は、私のときは１つの派遣隊当たり６日前後でしたのでその間は、タオルで体ふいたり顔をふいたり、水道で頭を洗ったりとかそういう状況で、全国の隊員はそういう状況で過ごしていました。４月の終わりぐらいからはシャワーも入れさせてもらえるような状況になっていた。

東日本大震災時の緊急消防援助隊の活動を鑑みて、消防庁では平成24年度に緊急消防援助隊広域活動拠点に関する検討会を開催した。その報告書の中には、東日本大震災時に消防隊員の方々の経験と苦労を解決するために、活動の支えとなる拠点整備のあり方や後方支援力強化に必要な対策等が盛り込まれた。

大規模災害時に同じ現場で活動する自衛隊の後方支援は、消防のそれよりはるかに充実しており、また警察消防より大きな組織力を有している。それらに比べ規模の小さな消防組織では前述したように、過酷な活動に携わる消防隊員の食料の調達は困難を極めている。現場での救助活動のみならず、ロジスティックス面でも自衛隊などと連携が可能となれば、より効率的な活動が可能になると思われる。

3　常備消防の補完ではない―消防団の力―

東日本大震災時に254名（うち公務中198名）の犠牲者を出した消防団は、住民の生命・財産を守るため多様な活動を担ってきた。消防の常備化が進んだ現在、消防団は平常時には常備消防の補完的な役割を果たす場合が多と考えられている。しかし東日本大震災のように極めて大規模な災害が起こった時には、常備消防の手が全く回らない火災現場の消火活動を消防団単独で成功させていた例が多数確認されている。

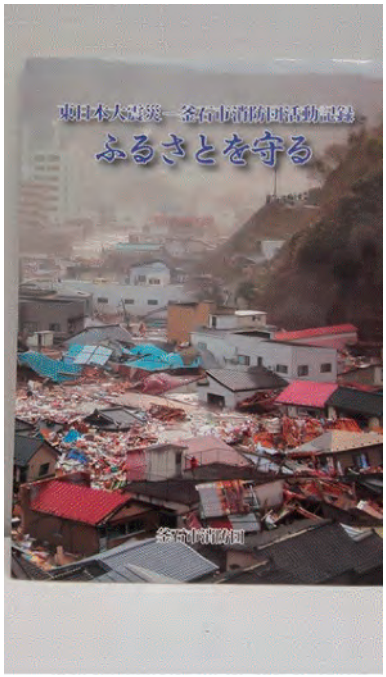

写真５　消防団の活動記録誌（釜石市消防団）

当時の消防団活動状況を記録した報告書等は多数刊行されているが、これらの報告書には一人一人の団員が各々の立場で震災を乗り越えてきた知恵や工夫、あるいは悩みや葛藤など、個人の思いはほとんど記録されていない。一人一人の団員が抱える葛藤や、苦境を乗り越えるために現場で役立った知恵や工夫など、公表されている報告書等では知ることのできなかった現場での生の声を広く共有化することを目的として、震災後多くの消防団員の方たちからお話を伺ってきた。特に、地震・津波・火災の複合被害を受けた地域の消防団は、常備消防に勝るとも劣らぬ、あるいは常備消防を上回る活動をしていたことが明らかとなった。ここで震災から５年後に、岩手県釜石市の消防団幹部にご協力いただき実現した詳細な聞き取り調査結果[2)]の一部を紹介させていただく。

まず東日本大震災後の消防団活動には消防団活動の本務といえる活動と、本務以外と考えられる多様な活動を担い、地域住民の生命・財産と、生き延びた住民の震災直後の生活を守るために極めて重要かつ過酷な活動を行っていたことが明らかとなった。本務として考えられる活動には、１）地震発生直後の水門閉鎖、２）津波からの避難誘導、３）消火活動、４）行方不明者の捜索があり、また本務以外として考えられる活動には、５）遺体の火葬場への搬送、６）避難所の運営指揮、７）傷病者への対応、８）防犯警備活動などがあげられる。消防団の本務として従事された活動と、団員の皆さんが感じ続けてきた葛藤について、以下に紹介させていただく。

（消防団幹部の発話より）

①地震発生直後の水門閉鎖

私は八百屋をやっていて、そのときは店にいた。地震が起きたときは地球が割れる

写真６　水門門扉閉鎖のため犠牲となった団員も

と思ったもん。「あーこれだめだ。消防団行かねばね」って言った。「お前ら絶対に津波来っから逃げろよ。ポンプを山さ高台にあげろ」って自分の車で回って行って。門扉閉めたら「すぐ逃げろ」と。

ポンプ車に乗ってサイレンを鳴らして行ったんです。そうしたら大きな門扉が後50センチで動かなくなってるところに遭遇した。委託された業者は委託されているから完全に閉めないとっていうことで四苦八苦してました。やっぱり使命感を皆持ってるので。「どうした？」って聞いたらば「後50センチぐらい閉まんないんだよねぇ」って言うから「いや、そんなことやってらんねぇからとにかくもういい。とにかく逃げろ。すぐ逃げるんだぞ」って言うことでわれわれは言ったまんま戻ったんだけどもね。その後に「流されないで助かったんだ」って聞いて、私が言ったように逃げてくれたらしい。

②津波からの避難誘導

釜石の津波っていうのは町方に過去50センチぐらい、膝かぶるぐらいの津波しか来てないのでそういった経験してるお年寄りが多いんです。で「またそのくらいしか来ないんだろう」ってたぶんそういう考えがあって皆さん結構普通に歩いてるんです。われわれは必死で、そこばっかりにいられないんで、とにかく自分たちの管轄内のところを隈なくサイレン鳴らして。

そこで私ふと思ったのは「避難して下さい」っていう綺麗な言葉で言っても避難しないんだよね。「あっ」と自分はそう思って「逃げろー、大津波来る。津波来たぞ」っていうような大きな声を出したらば「あっ、やっぱりこれは大変なことなんだな」って思った人は走って逃げるんです。半纏を着た人間が「逃げろ」って走って逃げれば「皆も消防団員が逃げてた」と大変なことだって逃げるのかなぁと思ったり。

それから家の前で立ったまま動かないおばあちゃんがいた。足腰悪いおばあちゃんで「これ、駄目だ。とにかくポンプ車に乗せて高台に行かなきゃ大変なことになる」ってことで、おばあちゃんをポンプ車に乗せた。われわれが消防団として与えられた仕事はやっぱりやんなきゃないっていうことで、一人でも二人でも助けなきゃないっていう気持ちは私にはあったんだけど。車に同席していた副部長が「もう限界だ。ここで上がんなきゃわれわれも死んでしまう」っていうことで、最後におばあちゃんを乗

せて仙寿院っていうお寺さんに上がった。上がって間もなく津波来た。

③消火活動

消防署の方から「火を消してくれ」というお願いが無線で入ったわけなんです。釜石消防署のポンプ車・救急車は殆ど壊滅状態で流されたわけ。火消すっていうのはうち（消防団）のポンプ車一台しか動かせなかったんで「ホースは消防署員が火点まで担いで持っていくからなんとか火を消してくれ」ってお願いされたもんだから。「じゃあ、まずやるだけやりましょう」っていうことで、防火水槽までポンプ車を持っていってそっからあるだけのホースを延長して。避難してる薬師公園の方角にある三階建ての建物が燃えてるって。「まずその火消さないと」っていうことで殆ど一昼夜、朝方までかかってその火を鎮火させたんです。釜石の消防団で水をあげて火を消したっていうのは第１分団３部の一台だけのポンプでこの町の火を消したんです。たった４・５名で火を消した。

釜石の火事が少なかったのが１分団の初期消火が早かったから。それが無ければ釜石も大火。間違いなく。二・三ヶ所で火の手が上がって、それが全て初期消火で対応出来た。助かった。あれ燃えたら終わりだもんな。消防団の活動記録の中にもそういう記載はないです。そういうの影でしかやってねぇ活動だから市長すら分かんねかったんだから。市長も後からだよな。うちの部で二ヶ所から火が出たの消したっていうのは市長でも分かんねぇ。

④行方不明者の捜索

一人の団員が「瓦礫、あのままでええんか」「あの中に遺体があんじゃねえか」「何人もまだ行方不明だ」「このままご遺体が傷んでいくのを放っておいていいんか」と、相談に来たんですよ。「自衛隊、警察来るの待っててていいんか」と。

機械は土建業やってるやつが「内陸部からおれが借りてくるから、金だけなんとかしてくれねえか」「オペレーターはおれらがやる」といってくれて。当初は山の竹を切ってきて、瓦礫をどけたりしましたがどうにもなんねえ。今度は市長に「市長このまんま自衛隊、警察、よその応援待っててても手が回んねえ」「われわれ住民で捜索隊を結成すっからリース代、必要経費出してもらえますか」って言ったら、市長は「それはその通りだ、やれるんだったらやって欲しい、あとで請求書だけ持って」っつうんで。

機械を２機借りて、毎日番割りを作って１ヶ月以上やって。機械を壊してしまったりしながらやりました。それで機械のリース代とか毎日捜索で出た方々に日当をいささかでも払えることができたんですよ。ですからそんなに傷まないうちに見つけるこ

とができたんですよ。自衛隊のこと待ってたんじゃ、無理だったと思いますよ。

⑤「自分の命」「助けるべき人の命」「家族の存在」の間で大きな葛藤を抱えている

1）団員の命を守る

消防団は津波のあとに退避ルールを作りましたが、釜石市消防団は退避時間を入れませんでした。消防団はそれを、何度も何度も議論しました。住民に最も身近な消防団が逃げることによって住民も逃げると。一方、いま助けられる命がそこにあるのに、30分経ちました、だからもうその人は置いてわれわれは先に避難しましょうっていうわけにいくかと。それは無理でしょうと。そんなことは人としてできるかと。マスコミの方々がルールは作りましたか？って聞きます。簡単に作れるもんじゃないですね。われわれは現場の責任者に任せることにしました。まずは危険を察したら逃げろと。簡単に言いますと、あとは現場で判断しろということです。

普通の人がこういう半纏着てるわけです。スーパーマンがマント着てるわけじゃないんです。だから消防団も生き残んないと今度守る人がいなくなってしまうのでやっぱり「命あって初めて人を守れる」っていう。だから震災後は「とにかく最短な活動をして逃げろ。生き延びろ。自分の命を守れ」とそういうことを団員には皆話をしてる。消防活動をおろそかにしろっていうことじゃなくて自分が生き延びてそれから地域を守れ。生き延びねば誰も守る人がいなくなってしまう。消防団壊滅してしまうと誰がポンプを動かし火災を消す？だからそういう考え方でいこうと。

それもこれも生きた・流されずに命が助かってるからできた、生きてれば何でもできる。死んでしまうとその活動ができなかった。まして部のトップが亡くなれば指示する人がいなくなるわけだから消防団も逃げて命助かることが一番の活動なんだなと。

2）団員の心を守る

震災直後は大丈夫だったんですが、２年経過して、３年目を迎えるという辺りから、全然寝れなくなったんですよ。警察とか自衛隊は悲惨な現場の中で活動して、それなりの心のケアは受けられましたが、消防団はいっぺん県の施設で大学の先生が来て、「心にこういうその負担といいますか、悲惨な現場で遺体を収容したり搬送したり、いろいろあったものですから、心の病になりますよ」っていうような説明は受けたものの、あとは何もなかったんですよ、心のケアは消防団に対しては残念ながら。

3）家族と団活動のはざまで

うちの団長は正義感が強いんです、自分を顧みずいく。結局、正義感と命は背中合わせです。だから正義感を持てる人ほど命を落としやすいです。私は臆病なんです。あの地震の時、私たまたま仕事が休みでうちにいました。水門閉鎖確認に行かなきゃ

と思って屯所に行こうとしたら女房に手引っ張られて今行ったら死ぬと。何メーターか分かんないけど「凄い津波が来るな」と女房はもう直感してました。

この40数年消防団やってるんだけど初めてだね。家族で泣かれたのは。「何でそこまでお父さんやんなきゃいけないの？もうたくさんだ。辞めてくれ。お父さんは家族ぶん投げて人のためにやってるでしょ。私たち残された家族はどうなるの？」とそう言われたときは「は～、なるほどなぁ」って。初めてだね。家族で泣かれて袖引っ張られたの。だから「あ～、もう辞めるべきなのかな」と。釜石の消防団、この震災のあとに40人近い団員が一挙に退団したんですよ、家族の反対で。いま残っているのはこんな家族の反対を押しきって残ってくれている団員です。

消防の常備化が進んだ我が国において、消防団は、平常時には常備消防の補完的な役割を果たす場合が多い。しかしながら東日本大震災のように極めて大規模な災害時には、消防団単独で同時多発火災の消火活動に成功し、市街地を延焼火災から守り抜いていた。津波からの避難誘導や逃げ遅れ者の救助、行方不明者の捜索など多くの場面で、常備消防と変わらぬ役割を担い、常備消防と変わらぬ成果をあげていた。

また、遺体の火葬場への搬送に代表される、誰も担い手のいないような業務を消防団が黙々とこなしていたこと、同時に、過酷な任に当たっていた団員に対し、その後十分なケアが実施されることはなく、長期にわたり苦しむ団員が存在していることも一般にはほとんど知られていない事実である。

団員の生命・安全を守るため、東日本大震災以降、水門閉鎖活動の在り方や津波からの退避ルールなどが検討されてきた。しかしながら消防団員にとっては未だに簡単に割り切って考えられる問題ではなく、「自分の命」「助けるべき人の命」「家族の存在」の間で多くの葛藤を抱えている。

一方、消防・防災の専門的な知識を有し通常から訓練を積む団員であるが、避難所内でのリーダーシップ、住民への的確な呼びかけや対外交渉など、人間力が非常に高い人材が多く存在していることも改めて確認することができた。消防団員は、消防・防災のリーダーとしての役割以上に、多様な場面で地域住民を率先する力を有していると考えられる。

4　婦人防火クラブ会長、地域の復興

最後にご紹介するのは、震災当時に宮城県気仙沼元吉地域婦人防火クラブ連合会会長を務めておられた及川秀子さんの奮闘である。筆者が及川さんの存在を知ることになったきっかけは、平成24年度に消防庁で開催された「津波避難対策推進マニュアル検討会」

の場であった。津波により甚大な被害を受けた気仙沼で、住まいを失った被災者の緊急避難先として、及川さんが経営するデニム縫製工場もその一つとなったことを伺った。そこでは、震災当日の３月11日から７月24日の避難所閉所式まで４か月以上にわたりピーク時には150名もの地域住民のいのちと暮らしをつないでいた。震災以前から婦人防火クラブ員として学んできた知識が役立つ場面が多々あったこと、地域コミュニティの一員として果たした役割、さらに経営者として震災後の地域の生業に貢献できる復興策に次々と取り組んでいることなど、教わることが非常に多い体験を乗り越えられている。

（及川さんの発話より）

①爪を立てるように夢中でのぼる

３月11日、私は仕事で気仙沼市の南町にいました。２時半過ぎ、46分でしょうか、ものすごい揺れで。あの揺れですから皆さん慌ててすぐ逃げようとしたり。でも揺れが半端でなかったから「じっとしていて、揺れがおさまったら一緒に逃げようね」と声掛けしながら。結局揺れは３分近くでした。

南町から自分の工場までは、普段なら国道45号線で40分もかからず来られます。でもとにかくみんなが国道に一斉に出たものですから、渋滞で走れなくて。信号はつきません。それでも従業員さんと家族のことが心配で、１秒でも早く会社に帰って来たかったので一生懸命車で走ったのですが、そのとおり渋滞で。工場まで半分程度のところまで来たら茶色の線が見えたのです。海の色が変わっていたのです。これが津波かなと思って。遠くに見えていた茶色の線が、たちまちそこまで来ていたのです。イチゴハウスと船までばらばら流れてきました。それで急遽気仙沼方面に向けて、ハンドルを切ったのです。だけど目の前で車も荷物もスローモーションの映画を見ているように流れていったのです。もはやここも波にのまれるのだなと、人の命はあっけないものだなと意外と冷静だったのです。でもここで終わっても息子たちや従業員さんは高台の会社にいるし、集落の人も多分うちに来るだろうから大丈夫だろうなと思いながら、どうしたらとにかく命が助かるかを考えて。

キャラバンが１台ギリギリ入れる奥まった所まで行って、車を降りるときはタイヤの高さの所に水がきていました。車を乗り捨てて少し小高くなっていた丘に、夢中で指の感覚も何もなかったですね。爪を土に立てるように登っていって、畑に出て、田んぼに出て、助かったと思いました。

そこで出会った集落の人たちに「うちに来るといい。今日は道路も何も通れないし。明るくなったら動きなさい」と言っていただいて。でも私はやはりどうしても工場が気になっていましたし、第一従業員さんの安否が心配でした。揺れが治まって電話を

かけたときはもう携帯がつながりませんでした。自分の居場所を教えられなかったので心配しているだろうなと。

歩いてでも今日中に工場に戻りたいからと言ったら、ウィンドブレーカーと袋におやつを詰めて、握らせてくださったのです。見ず知らずの私にそうやって声を掛けてもらって、助けてもらって。

お礼を言って工場目指して20分ほど歩いたのですが、寒くて寒くて。避難所になっていた階上中学校に雪の中行きました。そのときは日がとっぷりと暮れていましたし、雪は相変わらず降っていました。

②流れるようなおかゆ

次の朝、７時近くでしょうか、日が上ってきたのですが、朝焼けが美しくてね。雪はやんでいましたし、静かな朝で。でも周りを見たら、「これが私たちのまち？うそだろう」と思うくらい全滅でした。道路は凍結していて、車で工場に戻るのに半日かかりました。

お昼近くに工場に着いたら「生きていた、生きていた」とみんながすがって泣くのです。知らない人たちが50人、集落の人が100人。赤ちゃんもいれば、お年寄りもいる。150人が３月11日～14日までここで過ごしました。水がなく、食べ物がなく、困り果てていたのですが、これは奇跡だと思います。ファミリーマートの車がいっぱい荷物を積んで、ここに逃げてきたのです。ただあの人数で飲んだり食べたりしたら、たちまちなくなってしまいますよね。ところがもう１台奇跡的にダイドードリンコの自動販売機の車が、これまた大きな貨物に、荷物をいっぱい積んでここに逃げてきました。

だからプロパンガスでお湯を沸かして赤ちゃんのミルクもこしらえられました。お年寄りの方にはおにぎりをおかゆにして。器がないので、従業員さんの湯飲み茶わん

写真７・８　避難所となったオイカワデニムの建物

を借りて流れるようなおかゆでした。１人が一口ずつでした。温かくておいしいと、こうやって手を合わせ「ありがたい」とばあちゃんが泣くのですよ。「うめえなあ、うめえなあ」とじいちゃんが喜ぶのです。口を付けて、次の人に渡しますよね。本当はほかの人が口を付けた器は普段の生活の中でしたら考えられないことなのに、あのときは誰も嫌だとか汚いと言う人は１人もいなくて。ファミリーマートの食料で、２～３日命をつなぎました。

③平時のルールしかあてがおうとしない

４日目になったら赤ちゃんやお年寄りは、きちんとした体育館の指定された避難場所に移りました。ただ、指定された避難場所に入りきれない人も沢山いたので結局工場を避難所として解放しました。そして総合支所に行って「お願いします。これだけの人が生きているのです。すみません、お水が欲しいのです。避難所に指定してください」とお願いしましたが、「及川さんの気持ちは分かるけれども、指定された避難場所に動いてください」の一点張りだったのです。一番の反省点は、行政はあれ程の非常時でこれ以上の悲しさはないというのに、平時のルールしかあてがおうとしなかったことです。

ここには29軒118名の方がいました。班編成を組んで、薬がなくなったという人をキャラバン１台に乗せて、医療班が動いてくれました。お父さん方は船も流され港も壊されて仕事も何もできません。ここは気仙沼の南の玄関口だから、ここからきれいにしていこうと。道路の清掃班、港の瓦礫の片付け班というように作業を開始しました。お母さんたちは子供の世話とか食事の用意とかをして。子供たちも言うことをよく聞いて、水くみをしたり、小さい人の面倒を見たり。７月24日が閉所式だったのですが、それまでの間の地域の人たちとの絆は、大きいものができたと思います。

④どうしたらお互いに生きていけるか

ここの地域にあって自分たちはこの地域の人たちに何をしてあげられるか、どういうことをしたらお互いに生きていけるかを考えました。従業員も従業員の家族も無事だというのを確認した時点で、これはすぐ仕事ができると思いました。私はそれまでは働いて仕事をして、お金を得て家族を守ることが復興だと思っていたので、従業員さんを呼んで「10分でも30分でもいいから来て、みんなで仕事をしよう。元気だということをここから発信しよう」と話をして、納得してもらいました。

ここに避難してきていた漁師さんたちが半日かけて気仙沼市内でリースした大きな発電機を２台積んできてくださいました。そして線をつないでくださって、４月４日

の月曜日から仕事が始められました。みんな大喜びしました。電気のスイッチを入れるときにみんなで来てくれて、「良かった、良かった」と泣きながら喜んでくれました。従業員さんたちの意識も変わりました。みんなはまだ仕事がなくて混乱しているときに、自分たちは働ける、仕事がこんなにありがたかったのかと。震災後のミシンの音が違うのですよ。分かるのです。とにかくいい仕事をして恩返ししようということで、４月４日から稼働しています。でも心には葛藤があったのですよ。周りがこんななのに、果たして自分たちだけ働いていいものかどうか。でもやはりどこかが復興の音を立てないと、後に続いてこないと思いました。

写真９　アワビの貝殻で作ったボタンの説明をする及川さん

⑤まっすぐ縫えれば働ける

オイカワでしかできないものを考えたときに、地域資源の有効活用として、今まで捨てられていたサメの皮や歯、アワビの貝殻などを使ってボタンを作りました。そうすると、そこでも雇用が生まれるでしょう。漁網や大漁旗も使って。そのブランドを「SHIRO」としました。なぜかというと、何もなくなった一つの大きなキャンバスに、私たちが復興の文字と、きずなの色を付けていけばいいと思ったのです。

自分たちは自社ブランドで十分従業員さんを守れます。このSHIROブランドは被災した人たちのために、真っすぐさえ縫えれば働けるという職業訓練から始めます。５名の方が来てくださいました。あとはデザイン力でカバーすれば、SHIROは十分いいと思っています。そしてその売り上げは、寄付をさせてもらおうと思っています。だから別口座にしています。

ここに工場を移設していて良かったです。仕事も守れましたし、皆さんも守れたし、今からの生活も、多分ここでみんなと一緒に頑張れば叶うと思いますので、頑張るだけです。それが本当に日本中の人から、世界中の人から「頑張りなさいよ」「生きなさいよ」とエールをもらったご恩返しになるかと思っています。自分が150人の命を守ると。人として人

の命が一番大事というのは。だから今回の震災は、ものすごく教訓をいっぱい頂きました。自分たちが今思う地産は日本だと、地消は世界だと思います。ここからしかできないものを、発信していきたいと思っています。技術では絶対負けないと思います。

漁業を生業とする住民が多い地域の中で、若者向けのブランドジーンズを縫製する工場は異質の存在だった。実際、東日本大震災が起こるまでは挨拶程度の交流しかなかったということだが、震災が起きてから及川さんはずっと「ここの地域にあって自分たちはこの地域の人たちに何をしてあげられるか、どういうことをしたらお互いに生きていけるか」を考え行動してきた。地域の皆が生きていけることを復興の目標に据えた取り組みは一人の市民として、同時に一人の経営者として心の底から尊敬の念を感じる。

近年、自然災害をはじめとする様々なリスクを前提として、企業のBCP（事業継続計画）策定が盛んになっている。及川さんの取り組みは、企業の存続と成長をはかるためには、地域のコミュニティや様々なネットワークが同時に潤うことが出来なければ、幸せな結果を生むことはできないという大切なことを教えてくれる。

おわりに

東日本大震災時に消防活動や地域防災活動に尽力された数多くの方たちに、様々なことを教わり続けてきた10年であった。筆者自身が被災したわけではなく、現場で起きていた事実を正確に記録し、伝えていくことしかできない。本稿ではごく一部しか紹介することができないが、消防に関わり多くの命を守った活動をこの場を借りてお伝えしたいと考えた。

注１：平成16年新潟県中越地震時の災害対応で蓄積された経験と教訓を関係者の間で共有するとともに、次の災害では経験者としてアドバイスをする、あるいはノウハウを提供する人的なつながりの拠点として平成27年に設立。現在、全国89の自治体が会員となっている。

参考文献

１）田中聡・重川希志依・柄谷友香、東日本大震災における緊急消防援助隊のエスノグラフィー調査、東日本大震災特別論文集№1、2012年（平成24年）８月、地域安全学会

２）重川希志依・田中聡・阿部郁男、災害エスノグラフィーを用いた東日本大震災時の消防団活動実態調査―釜石市を事例として―、地域安全学会梗概集№42、2018年（平成30年）５月、地域安全学会